

学 校 名

横浜市立永田台小学校

問い合わせ先: 電話番号 (045) 714-4277

I 学校の概要

1 児童生徒数, 学級数, 教職員数

(平成27年3月現在)

児童数 487名
 学級数 17学級
 教職員数 30名

2 地域の概況

学校はマンションや団地に囲まれているが、地域の方々は、花や木を植え整備し、緑で住みやすい町作りをしている。しかし、団地も年数を経て、横浜市内でも最も高齢化が進んでいる地域となっている。

3 環境教育の全体計画等

環境教育全体計画 平成27年度 年度別

環境教育の目標
 自然・社会・環境の重要性を認識し、よりよい環境を創っていくことと自ら実践する意欲を高めることを目指す。

環境に対する豊かな感性の育成
 自ら自ら行動し、環境に親しみ、自然・社会・環境の重要性を認識し、よりよい環境を創っていくことと自ら実践する意欲を高めることを目指す。

環境に関する基礎的・応用的知識
 身近な環境や自然の事象・現象の仕組みや原因を説明し、環境問題の解決策を提案することを目指す。

環境に関する実践的・創造的知識
 身近な環境や自然の事象・現象の仕組みや原因を説明し、環境問題の解決策を提案することを目指す。

環境教育と関係する関係者
 自然 社会 環境 関係者 学校 関係者 市民 関係者 関係者

指導の重点
 ・子どもが環境問題に関心を持ち、自ら実践する意欲を高めることを目指す。
 ・環境問題の解決策を提案し、実践的な学習を行う。

学年	環境への関心	環境への知識
1年生	自然に興味を持つ。	自然の観察を行う。
2年生	自然の観察を行う。	自然の観察を行う。
3年生	自然の観察を行う。	自然の観察を行う。

1. 学習・活動の計画
 (1) 自然観察・環境観察を実施して観察できる環境や自然を体験し、観察する。
 (2) 環境教育を通して環境学習の重要性を認識し、実践を行う。
 (3) 環境教育を通して環境学習の重要性を認識し、実践を行う。

2. 環境教育の推進
 (1) 環境教育の推進 学校ごとに計画を立て、実施する。
 (2) 環境教育の推進 学校ごとに計画を立て、実施する。
 (3) 環境教育の推進 学校ごとに計画を立て、実施する。

3. 環境教育の推進
 (1) 環境教育の推進 学校ごとに計画を立て、実施する。
 (2) 環境教育の推進 学校ごとに計画を立て、実施する。
 (3) 環境教育の推進 学校ごとに計画を立て、実施する。

II 研究主題

「サステイナブルスクールを志向する環境デザインについての研究」

III 研究の概要

1 研究のねらい

「作る、できる、発表する」ことだけに満足することなく、「影響、変容、変革」を求める子どもの姿を目指している。観測を通して、多くの気づきを高め、課題意識をもち、身近な実践を行っていくことができるようにする。

2 校内の研究推進体制

(1) 研究推進体制

① 校内体制

校長、副校長、教務主任、環境部を中心に計画・研究・情報発信を行う。

② 関係諸機関との連携

- ・CASIO 計算機、若尾さんによる「命の授業」
- ・横浜市水道局による出前授業
- ・エコプロダクツ 2014・2015 参加
- ・富士通による出前授業
- ・全国小中環境教育全国大会開催

(2) 観測体制

日々の観測は以下の通りである。

- ・5年生
雲量・雲形の観測
- ・6年生
最高気温、最低気温、現在気温の観測
校内への発信

(3) 観測機器などの設置状況

- ① 百葉箱 (デジタル温度計)
- ② 湿度計 (各教室配置)
- ③ デジタルカメラ
- ④ 記録ファイル



3 研究内容

(1) グローブの教育課程への位置付け

- ①身近な環境、自然事象に目を向け、「影響変容・変革」を求める子どもの育成を図る。
- ②日々の観測を続けることで、世界の環境に目を向けることのできる子どもの育成を図る。

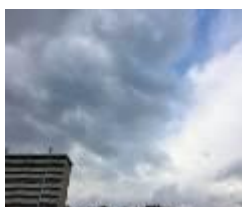
(2) グローブを活用した教育実践

環境委員会

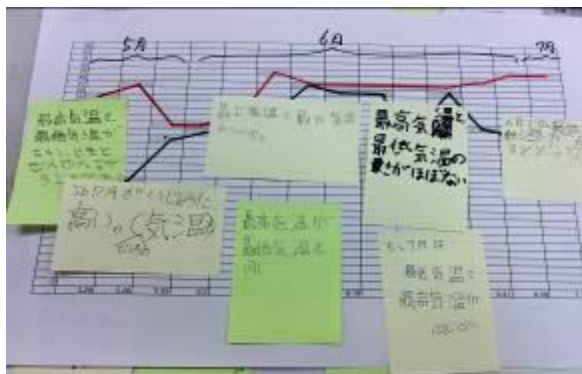
「気温の観測と雲量・雲形の観測」

日々の常時活動として、最高気温・最低気、雲量・雲形の観測を行ってきた。

初めのうちは、観測する手段・方法を知ること一杯で、記録を正確に取ることを目的とした。



気温の観測は、最高気温、最低気温もともに記録していった。気温の記録を取りためていくと同時に、これまで測った記録をデータ化、グラフにして、どのような変化や特色があるのか考えていった。



子どもたちは季節によって、同じような気温の変化があることを実際の記録から、確かめることができた。また、最高気温、最低気温の差に目を向けた子どもは、「季節や天気により、その差が変わってくるのではないか。」と考えた。

雲の観察では、毎日のように観察することで、天気と関連付けて考えられる子どもが出てきた。また、雲の形に興味をもつようにもなっていた。「気温の変化が低い日には、雲りの日だよ。」と気温の観測と雲の量を関連づけている子どももいた。

1年目を過ぎると、自分たちだけが記録していくだけではもったいないと、校内に広める活動が活発化してきた。とってきた写真と気温の変化をグラフにまとめ、校内に掲示し、発信した。



2年目からは、より日常化することを意識し、校内の掲示板にその日の気温と一言アドバイスを考え、発信した。「少しずつ寒くなってきたから、暖かい格好をしよう。」「寒いけれど、外で、元気に遊ぼう。」「気温が高いから、しっかり水分補給をしよう。」などのその時々に合わせて生活アドバイスを自分たちで考えていた。



(別紙様式2) 環境のための地球学習観測プログラム(グローブ) 推進事業研究成果報告書

また、今年の記録と、昨年の記録を比較してもらおうと、子どもたちは手作りのカレンダーを作成した。そこには、その月の平均気温や、その月の雲の写真のをせ、今日の様子と比較できるよう工夫した。



「グローブ生徒の集い」では、同じグローブ指定校の生徒に分かりやすく発表できるよう、自分たちが取り組んできたことを原稿にまとめていった。初めて使うパワーポイント、そして中学生、高校生のお兄さん、お姉さん、大人の方々。そんな大勢の前で発表することに、代表となった子どもは緊張をした。しかし、その発表が子どもの自信、そして、その後の意欲につながっていった。朝会でも2年間の成果を全校に伝えた。



日々の観測は、とても大切であり、子どもにとって価値ある教育実践ではあるが、それ以上に、「生徒の集い」では、プレゼンテーション力やコミュニケーション力を育てることができ、とても充実した教育実践だと考える。今後、同じグローブ校との情報交換、また、もう少し視野を広くし、世界に目を向け、世界各国との比較をしていけると、地球環境問題への気付きにもつながり、よりよい教育実践になるのではないかと考える。

1年生

「季節や自然、いのちを感じて」

CASIO計算機、若尾先生の「命の授業」でもらったあさがおの種から、小さな小さな種だけれど、それは、病気で亡くなったこうすけくんの願いがこもった「いのち」であるということを知り、活動に取り組んだ。

児童遊園地でたくさん拾ったどんぐりを、沖縄の小学校に送るとお礼にお手紙が届き、ユネスコスクール同士の交流にチャレンジすることができた。

夏には土粘土、シャボン玉、水遊び。秋にはどんぐり、落ち葉。冬には、霜柱ふみなど、自然と触れ合う体験を1年間通して行った。



2年生

「やさいをそだてよう」

2年生では、夏野菜、冬野菜と、1年間を通して野菜を育てた。野菜にも、いのちがあることや、世話の仕方、天候によって、うまく育たないことを学んだ。野菜を食べられることは、自分のいのちを支えていることを知り、世話の大変さを知りつつも、収穫後には、満足感や、愛着をもつことができた。野菜といのちのつながりを意識し、これから学年が進むにつれ、野菜が立派に育つためには、気候が大切であり、気候を守っていくのは自分たちであるという、つながりに気付いていけるよう願っている。



3年生

「まちのいいとこじまん」

自分たちの住む永田台のまちの「いいトコ」を見つけ、もっともつこのまちに愛着をもっていった。この、大好きなまちでどうやって生きていくかを考え、1年間学習に取り組んだ。

まち探検を続けていくことで、まちには、自分たちの大好きな公園や、自然を守ってくれている人たちがたくさんいることに気付いた。



そんな大好きなまちの未来を想像し、自分たちにできることを考えていった。「もっと自然を多くしたい。」「生き物が住みやすいまちにしたい。」と子どもの思いは膨らんでいった。まず、まちをよくする前に自分たちが毎日通っている学校から変えていこうと、学校の環境整備に取り組んだ。



技術員さんのお手伝いや、校内の花の水やり、ごみ拾い活動など自分たちにできることから始めていった。



4年

「永田台 ECO キッズ」

4年生では、身の周りの環境に目をむけ、自分たちのできるエコ活動に取り組んだ。体験学習では、普段味わえない自然に触れ、自然の大切さについて知り、社会では、見学することで焼却工場の仕組みや苦労を知った。そこで、節電のことを学ぶグループ、昔の暮らしから身の回りのもったいないものをなくすグループ、学校のごみを分別して、ごみを減らすグループと分かれて活動した。

節電のグループでは、太陽光発電について学び、自分たちでソーラーカーを作る取り組みを行った。太陽光電池について学び、いらなくなったスケートボードとすのこ、電動ドリルを使って、自分たちが乗れる大きさのソーラーカーを完成させた。ソーラーカーを作る際にうまくいかない部分を技術員さんの力を借りた。また、同じように太陽光電池を充電しても動くものと電力が足りず、動かないものがあることに気づき、生活の中で自分たちが使うものの中には電力を多く消費するものがあることを知り、生活の中で多くの電気を使っていることに気づいた。自分たちでソーラーカーを作りたいという思いから多くの人の力を借りて、自分たち自身で課題を解決していき、環境のことについて考えられるようになった。



身の周りのもったいないをなくすグループでは、昔の人の生活で、ごみが非常に少ないことを知り、人々が生活する中で多くのごみをだしていることに気が付いた。そこで、紙すきや野菜の皮でできるエコ料理、廃油をつかったろうそく作りを行い、身の周りのもったいないものに目を向けて、自分たちの生活について見直す機会をもった。

この活動を通して、自分たちの身の周りにはたくさんのもったいないものがあることを知り、体験を通して自分事として考えるようになり、ほかの人にも知ってもらいたいという思いをもった。

(別紙様式2) 環境のための地球学習観測プログラム(グローブ) 推進事業研究成果報告書



ごみの分別を考えるグループでは、まず自分たちの家では、どのようなごみが出ていることが多いのかを調べた。調べることで、燃やすごみやプラスチックごみを多く出していることに気が付いた。その中でリサイクルできる紙ごみも燃やすごみとして捨ててしまい、ごみを増やしていることに気が付いた。また、多くの時間を過ごす学校が去年1年間で出したごみの量について調べ、多くのごみが出ていることや、クラスで分別できていないという課題をもった。

そこで、クラスに分別を呼びかける活動から始め、低学年や高学年に分別の大切さを伝えた。また、ごみダイエットグラフを作り、分別することによって燃やすごみを減らすことができることを目に見える形で残した。ごみを分別する活動を通して、分別は面倒くさいけれど、やらないと自分たちが住んでいる町や地球にかかわる問題になるという危機感を持ち、取り組みを続けよう話し合った。分別を続けるためには、自分自身が面倒くさいという気持ちと向き合い、活動することが大切と考えられるようになった。また、他学年や地域の人にごみの分別を呼びかけたり、ごみ拾いをしていた6年生と協力して町のごみを分別したりした。



自分たちができることを少しずつすることによって地球の問題を解決できることにつながることを知れた。また、他学年や技術員さんと関わることで新たな視点を持つ大切さも体験できた。

5年生

「人と、自然と、つながる永田台」

5年生では、さまざまな人や、ものとのつながることで、その知恵や工夫を知り、自分を成長させることを目指し、さまざまな活動を行った。特に、ホタルの生育、米作りを中心に学習進めた。

地域に、ホタルを生育している人たちがいることを知り、その方の思いを知ることで、「自分たちでもホタルの住みやすい環境を作りたい。」と考えた。



横浜ホタルの会の丸茂さんから、ホタルの住みやすい環境について話を聞いたり、実際に自分たちで調べたりすることで、「ホタルにとって住みやすい環境は、自分たちにとっても住みやすい環境であること」に気付いていった。実際に校内のビオトープを活用して、ホタルが住みやすい環境を作ろうと子どもたちは動き出している。グローブ活動の水質調査と関連付けて学習していくことも期待できる。

米作りでは、単に稲から米を作るだけでなく、田んぼの土の中の生き物にまで関心を持ち、田んぼ作りを進めていった。すべて手作業で行うことで、その大変さを知るとともに、体全身で、自然と触れ合う体験ができた。





個別支援学級

「グリーンクリーン アースレンジャー」

個別支援学級では、一人ひとりの成長過程を大切にしながら、小集団で教えあい学びあいながら、個に応じた自立を目指し、学習している。

その核として生活単元学習・総合的な学習の時間を位置づけている。

今年は、これまでに取り組んだことが、様々な場面で取り上げられた。

平成23年度に取り組んだ「だいすきはな変身大作戦」で作成した絵画が、辰巳芳子「命のスープ」「天のしずく」のドキュメンタリー映画にほんの少しですが出ることとなった。

また、平成24年度から取り組んだ「ドングリプロジェクト」では、劇で使った背景の壁面が平成27年度から使用される図工の教科書に掲載されることになり、6月には、約3年間育ててきた東日本で被災したドングリの苗51本を、高学年を中心に福島県いわき市に植樹してきた。これは、子どもたちにとっても担任にとっても大変貴重な体験となった。



そして、平成25年度に始めた「生ごみワーストワン脱出大作戦」では、ごみのことは地域とともに取り組むこととして、永田地域ケアプラザで行われた永田台支合い祭りや本校で行われた第46回小中学校環境教育全国大会などで、今までやってきた取り組みを劇で伝えたり水切り体験コーナーを設けたりして伝えてきた。東京ビックサイトで行われたエコプロダクツ展2014でも子どもたちの取組が注目を集め、環境に関わる新聞や雑誌で取り上げられた。

子どもたちのやってきた活動がこのように様々なところで注目されることは、子どもたちの自己有用感や自尊感情の高まりにつながってきている。

今年は、身近な環境から発展し地球環境まで意識して「グリーン・クリーンアースレンジャー」に取り組んだ。グリーンカーテンを広めるために栽培講座を開いたり、栽培したゴーヤで料理したりした。さらに、竹林の間伐材を活用した活動、竹楽器で演奏・竹チップで腐葉土を作ってカブトムシの飼育などに取り組むとともに、自分たちの住んでいる南区の海拔を知り、地球温暖化と海拔の問題にも関心をもった。



1年生から6年生まで在籍する本学級では、大きなテーマから個に応じた課題を見つけ楽しく取り組んできました。今年の活動もこれで終わるのでなく、発展的に花開き実を結び、またそれが種となって広がっていくものと期待している。

IV 研究の成果と課題

1 研究の成果

- ・子どもたちの中に気温や雲の様子に興味をもつ子が増えた。

環境委員会が日々の記録を、掲示板、カレンダー等で発信することで、気温や湿度を意識する児童も増えた。朝の放送では、情報委員会がその日の気温や天気を知らせるなど、校内全体で、気候に関する意識が変わった。

2 研究の課題

- ・発信を行うことで、意識の変容を生み出すことができたものの、自分たちがその後どのような取組をしていけばよいか、具体的行動に移すことができていない。また、気温、雲の観測だけでは、日々の記録から子どもが気付くことは多くなかった。実際には、季節による温度の変化を日常とすり合わせるだけに留まってしまった。

V 今後の展望

- ・これまでの学習を生かし、よりよい発信を行い、日常化する。
- ・地球環境問題に目を向けて、意識して取り組む。
- ・身近な環境により目を向け、そして、正しい観測が行えるよう、校内の田んぼ、ビオトープの水質を調査していく。
- ・世界の気候を視野に入れ、国際理解を深めていく。